

況^{きわ}の^の第^{だい}一^{いち}戀^{こひ}

野^の邊^の之^の春^{はる}駒^{こま}



國^{くに}信^{のぶ}

第^{だい}四^し號^{ごう}

照藏其翌朝飯もろく宅を出て例の商館へ行つて聞けば駒吉は昨夜の儘まだ
 歸らぬとの趣はゆゑ是は不審に思へども兎も角にも門前に張番をしていたならば
 解るであらうと思案を決し物陰に立ち忍びて今かくと待つとも知らず彼三人が打
 連立何のこぞと咄しながら門前まで來掛る所を長くし待草臥たる照藏は走出
 て駒さん待など呼び止られオ、照さんが能く出た併私には此客人を一寸且那又引
 合せれば其うちお前は私の部屋で一吸煙遣つて居て下さいの行よか、る又引止煙
 草所の譯ではない宅は大變か起つだから直に一緒に歸んなさいの無理に手を取行
 かふとするに扱は此方の混賑を喚付たると疾くも察した駒吉は彼の兩人に目顔で夫
 ど知らずれば彌七と素より吉兵衛も然る者なれば忽地悟つて照藏に打對ひ十時と約
 した取引に番頭の駒吉どのを用があるとして連行れては二名が甚だ迷惑るといふ尾
 に付て駒吉がお聞の通り約定を堅く致した今日の取引此節相場の亂高下はお前も知

つて居なざるだらふに時間が延れバ苦情が起り且那を始め容人にも何分私か濟ませ
 ねばといふ照藏聞あへつとんか苦情が起らふか萬々此身が引受てどうにも事を納
 めるから是非とも歸れど引強に彌七等は腹を立彼是辭に角芽立果は喧嘩にありか
 るを商館れ主人ホーシンの聞付け何事やらんと出て見れば渠等が争ふ語は解らねど
 我が雇人の駒吉を無体に引張行ふとするは亂暴人と思つたゆゑ突然持たるメテッキ
 にて照藏を打擲した上靴にて散さん蹴られしに俠客質の照藏故オノノ土足は掛居
 つたあと矢庭にホーシンを引捕へ三間はかり投出したので髭先生は大腹立にて其儘
 宅へ駆入なや否やピストル銃を持って飛出て打放さふと狙ひ掛るを彌七や喜兵衛が駭
 いてまア〜須臾と支へれば照藏は怯たる体なくサア面白い撃れるなら此身の身体
 を打たせて遣らふと刺續たらけの両肌おし脱き立ち對ふをば駒吉等三人が慌て止め
 るも聞入ず照藏とホーシンの尙大喧嘩をやるうとするを近所の外國人までが追
 に駆付けて中に立入れし宥め先照藏を隣家なる異人館の門内へ連れ込喧嘩の起りを

口ぐにさかれ腹はたてども
 照藏を彼駒吉の一件を明白に
 と言ひかたさに急き用事で駒
 吉城進歸らふとする身大なるを
 彌七等が支へぬゆゑ言争つて
 ぬる折から譯を糺さず毛唐人
 に土足に掛茶を蹴らきては何
 分承知があらねへから最き此
 上と命は取り遣り止すとはな
 してくだらへ身向飛出さふと
 焦燥所る此騒動を開付て一
 散走すま駈けて來ぬお鶴どか



米が絶つ付さどぞ短氣を出さぬで頻りに宿めて居りちよお米の弟を梅吉(三十)といふは今此地にて男を賣りエロツキの食客を七八名も宅へ置く相應な兄イ株だか照藏と外國人が喧嘩をしゑとの噂を聞き捨置れぬと駈出れば兄貴よ引けを取せてはと彼乃食客が觸廻りア瞬々間に數十人の博徒等杯を驅集ゑたのく手頃の棒など携へ其異人館を打毀せどワイく言て押寄せけいよく騒ぎが大きくなるをお鶴は見依よア氣が氣で那々是等の人を種くと辭滅盡してれし鎮めればお米を又梅吉よ彼内密の譯を断し騒立れてと實よ困れと歸つて呉れろと頼んだので梅吉も漸く吞込み彌次馬丈は追歸したれど自分ばかりは照藏の側に附添ひ扣へてゐるよお鶴も少し氣が鎮まれば又照藏乃側へ寄つた腹の立もお道理ながら事の起りは私からお頼み申た譯を見ても若も乃とが依時は何様ア生てゐられませせ異人乃方は私が行つて何とが咄し扱付はばから了簡してと泣て頼灸を其所に居合す中裁人等も俱く辭を添ふゆゑ照藏も最初がツヒ意氣張で腹は立れと素よア好む争ひあつねを相手よ苦

情さるなくば皆その顔にめんど勘辨しやうと言つたけでお鶴と漸と胸撫下し中裁人等と侶俱に彼商館へ行つて見ると爰にも多くの中裁人が髭先生扱宥めてぬれど扱られたやい腹立であかく承知をしかねてぬ依をお鶴と土間お天愈を摺付茶元照藏等駒吉は實の兄弟同様者にて爲恨思つて連歸らふと致したとの間違から斯い論譯になつたのさむと辭を盡して詫入れと語が通せぬを用扱かさぬ中裁人の中にゐる金澤信一(二十)といふ通辨者が言を取次で説得なれば駒吉を又速々納めて彼乃取引扱しやう等思へを俱に辭を添なごしたの漸くホーシンも承知扱した故やノ嬉しやとお鶴と歡む此上は駒吉を少しの間お暇とぬへ駒吉からホーシンに内々頼みさをしたやら駒吉と用があるからまだ遣らさぬと斷らされたのでお鶴は望み扱失つたが併時間の後きた故取引は翌日の事とて彼爾七等をも戻されたさば是に少しは安堵して控んなり駒吉さん用が濟たら遅くも是非く來てお呉れ等堅く約して商館扱別きて立出照藏夫婦に斯く告れば駒吉を引張出せぬを遺憾に思へと術なさにね

乃く其場は立歸つたが此時までも彌次馬連が照藏等は様子危々頻りに案トて見舞に來るを事が濟たと此は、に只歸してもやらぬとて丸山乃歡喜樓へ彼多人數の者城連行き大酒宴を催したが照藏は駒吉が今にも來やうと思ふ故梅吉を我が名代に出して是にも餘程は散財をさるるをお鶴はいくく氣の毒で堪らず禮と詫言を種々に言つてヨモヤ今夜は照藏は義理に駒吉が來ぬであらぬと首を伸して待てるれど十二時近くなつて來ねばお鶴と滋く氣が揉返す迎むに行ぬと出掛るを照藏が引止ぬ前が行ても駒吉が茶がして歸りてしまいからぬ米を遣らふ言は依、にお鶴と夜更に氣の毒あれど何様かあして駒吉を今夜のうちに呼たさに夫は御苦勞さほなぐみと頼むよお米は承知して桃灯片手に立出たが姑く待つて立歸す那ボウイの寅吉に是非駒さんに會たいから呼んでね呉れと頼んだが取次を呉たきと駒さんと出ても來ず今夜は旦那の用向で何分に手が放されねば明朝行くとの返答もるぞんなら一寸爰まで來てとねし返して呼んで見て會ふ出る間もなれ等の答へよびどく

歸つて來はしたと言ぬ照藏打案トて偕は例乃一件を嗅付られた疾くも悟り歸つぬみれば彼はと意見城間く城面倒がつて逃居依のに相違とあい此上は己が行き異人に會て仔細を明し此取引を止させると他に思案とあるまい立に掛依をね鶴が引止ぬ然らざる時は駒さんは暇に有るは知れた事私立聞したとから不首尾にしてはど打萎れぬを照藏は見返りて成程夫も道理ぬれと匿して置いて駒吉は身体へ索ひ掛るやうでは悔んだ所が返らぬと併然程と思ふなら此身が行つて駒吉に會ひ一應止て聞入れずば主人に事を打明やうと又照藏が遣行たぬとや夜も甚く更たれば裏へ廻り表へ廻りて二時間ほども門城敵茶をさかしく明ける体をさきに精根盡て立歸す是等と城断ひうち夜とほのぐと明けたれを此上は又商館の門前に待受て引捕るの外はないと這回は照藏米ね鶴の三人打進出掛て行くとは是より先に駒吉は主川のやと語魔かして照藏方へは赴かず竊に江戸町の裏家に住て是を山師を懇意にすは石橋清吉方へ行き彌七喜兵衛等と集會して今日の不都合乃咄しから翌日と染

等を出し扱て術よく取引成しやうと其混騰を謀し合せ夜は明るの候待受て例は三人
 が打連立又商館へ行つて見るとね鶴が門の邊りにゐて駒さんね前の爲成思つて照
 藏さんが昨日は騒動昨夜を度く迎ひに遣つゝゑに遊てゐるとはほんば身知れず爰
 でお前成見付ゑからは是非とも連れて行ねばならぬ一緒にいれお出せ引強掛られギョッ
 したとさ然氣なく嘘八百で語茶まかし欺して門成這入りぬすれ袖に絶て放
 ねば解らぬ阿魔だど駒吉が握拳でニツニツ撲て倒して行ふとするゆゑお鶴も今は
 堪り兼故郷にござる親達や那妹公の事を忘る身体に索の掛るやうな此取引成しや
 うとて私が聞いてはさせられぬとむしや振付ゑ手成弛めねば駒吉ばかりか他乃二名
 を夫を今更口外されては我が目算が違ぬと思ふば威して見ぬり賺した種く悶着を
 して居る成彼ホーシンが聞付て何事か解んと出て見れば昨日駒吉の姉だといつて詫
 よ來ぬね鶴も先双方を引分て後仔細を問れて今とはや匿し切られぬ場合と思ひ立
 聞成した事柄を箇様くとお鶴が言へど語が通せねば解り兼ねるを駒吉と竊かに歡ひ

自分も英語は遣へねと常に主人の側にゐて少しと断しを出來る故頻りにお鶴を追歸
 せど口と手真似で勸める成小蔭に躲きて最前と氣を揉ん居る照藏夫婦が飛出さ
 んかと思つゝゑ昨日はやり騒ぎにあつては夫も又大事と思案のうちに照藏はフト
 氣の付いたとがれば昨日中裁に立入ぬ彼通判者の金澤信一が近所にゐる故飛で行
 き昨日の禮成演たる上質は是く斯いふ譯で此取引とせられねば何卒旦那貴君
 からは是等の譯成頼んだを信一は承知して今駒吉がホーシンを旨く欺くふする所
 へ遣つて來て云々と彼取引の混騰をお鶴が松政を聞ぬととり夫成止やり今
 日を此悶着をしゑと乃とまを委細に咄せど英語で言へば駒吉等には聞取す別乃用で
 信一が來たと今のみ思つてゐるうちホーシンと其一件成聞と齋しく大腹立にて突然
 駒吉を靴で蹴飛ばしアナタ皆泥坊あります速く歸家宜しいと白眼付く追退す頼
 マンテルの藏かお弗銀五枚取出しれ鶴成招いて遣らふと尋する成イエ私に控んな品を
 戴く譯は尋辭退成すを信一が差寄つてお前が深切に禁止したので旦那が損をされぬ

禮に遣はすとのとあれば貫をなすいと勸めてもイエ〜た金を頂くより駒吉さん乃
 身の上を尋いふ城信一聞あへず夫も僕が承知して且那の前を執成さうか解出されぬ
 金は受取て歸るが能いと諭されて心ならずも金城収受門から外へ出る所を腹立紛れ
 の駒吉が出過阿魔めと言さぐら撲ア掛を照藏が見て駒公夫は何の真似だ馬鹿をせ
 ずと咄しがあるから一緒に來ると聲城掛られ振上た手も拍子が抜れば追面目
 かつたや解一目散に逃出たれを駒公逃すとまア待な咄しがある今照藏が跡を慕めて
 追掛たれと午ち何所へか紛れ込んで姿も見えずなつた故詮方がなさに照藏は米ね
 鶴を引連て立歸つぬ其後に渠が在家を種〜と探を彼才取の彌七の家に躲れてゐ
 ると解つぬ故態〜照藏が迎ひに行き歸んな〜と勸めて却つて駒吉は大不腹に
 て當然なら那乃阿魔を生して置とし流へ乃だが病氣の時に岡山で世話にあつた譯も
 何れを夫にめんどて助命て置が此先面も見ねへか解わか乃他人と思つて居ると那
 奴に傳へて呉ませへ取ても付れぬ返答に呆れ果たが押返して駒公夫は悪い合點彼

一件をお鶴さんが松政の二階にて聞と齊しく氣を揉出し若此事が露顯をばれば言は
 づと知きたれた前は科人然字あいうちに意見をして止させたいと泣て乃頼みを此身も
 見捨て置め故那騒動まで遣た末が餘儀な々信一を頼込み且那に告て取引を止めた
 時にせね鶴さんが前乃身体が無難で濟やうに呉〜頼んで深切をね前も定めて聞
 てゐたらぬ夫を今更敵のやうに思つてゐるとは何のとだと辭を盡して諫めても駒吉
 は一筋にお鶴に邪魔されたのを口惜と思へば承知を捨ぬ故其うち心が和らさだ
 ふとす〜照藏が歸つた後お米が行て宥めてをさか〜に聞入れねばお鶴を餘ア
 に堪かねて自身に行譯を咄し照藏さん乃夫婦何分義理が濟ぬると泣て口説を耳
 にも掛す怒りに任せて駒吉が故〜に打擲ぬるぬど、いぬ無法仕打に是非をな
 く姑く捨〜置たれどお鶴も是迄駒吉に追〜自分の衣類を剥れ座敷へ出るもヒド
 算段で漸と都合をして居るうち此程から悶着に折角掛つた口も斷ア稼業を休んで
 氣心かり揉むいど活計も苦しくなれば是等がお鶴の身体に障りドツと寐込で病付

急ので照藏夫婦は心を痛め代々ぐに見舞に來ては介抱など幾とる程ゆゑ是幾知ら
 せて遣ふなや如何に氣強ぬ駒吉でも來て看護をすゑて何ら段と病氣の様子を言て遣
 れども只は一度を顔さへ出せぬをお鶴はしみく口惜々思ひ先頃染が病氣にて臭さ
 に誰も寄付ぬ幾介抱幾しぬ乃みからず身を投やりと迫つぬを助けて内緒で療治をさ
 せぬが旦那乃疑念乃基となれて種々の辛苦をしたとを忘れ切ても仕舞まいに身体も
 利かぬ此大病殊更貧苦の身に迫るを死ぬから死ねとの不人情こんな人でさあかた
 が吉松といぬ魔がせして魂までが入換つある積は怨みと吉松猫やはう容容く添
 とせやぞと遺恨は眼尻血はしるまでと齒咬食ぬぬお鶴の變相いと凄しく見しとぞ
 夫は備置き吉松猫と同所で唐物渡世幾れる三好源次郎といぬ客の金のあるのを見込
 を付て旨い手管で引出しぬ其ペテくよて駒吉と大泣きをり樂しむ混臆が彼源次郎の
 耳に入つ尻が割ては、大悶着モウ斯うおぼえてと捨鉢と度胸を極ぬ吉松が客に對して愛
 想盡しハハ左様あやと別れて後は此評判で人氣を失ひ証されぬ來ぬ客もなぬれを立

引筋も出來兼候を無理算段で
 とし居れ心首もまわらぬ借金
 に尻が此地に落着らぬすつと
 て逃てと駒吉は逢度毎よせほ
 追れども駒吉を彼商館を放
 逐せられた其後は彌七乃宅に同
 居して才取めいた事はすれど
 此程不筋を取引を仕掛ぬらわ
 らが高々なつて虚心集ふ欺さ
 ざる赤籠さんもぬき故に逃亡
 す候に之路費がなさにかんが
 ねてのみ居る所へ或夜吉松が



遣て来てお金乃都合が出来たから些ども疾く逃て下すい斯ういふうちにも氣が迫急
 と頻りに手を取引張る体か餘程慌て見ゆれども金が出来ぬと言ふからと様子は跡を
 も解らふと物取敢ず連立て彌七の宅は駈出しぬが追人が掛籠と氣遣ぬ故船場などへ
 は赴かれ亦當はるべき山路へ分入る黒白も判ぬ眞の闇を夢中で四五里を走ら程に
 岩角をへ蹴付た故か吉松は足を痛灸て駒をん私は歩行をないと泣出しそりな聲で
 言へば夫も道理と駒吉が木乃根に腰城打掛と坊ホツと一息吐ながら四邊見廻しコソ
 吉松慌て和女が引張ゆる譯を聞かず駈出しぬが金の都合の出来た言ふとどら働
 んて拵へたと小聲で聞者と打うなづき豫てお前に咄した通す追く追る私身詰り
 どぞど路用の工面をと思ふ矢先必然の方から持て来た一包の紙幣幾計の法かは知れ
 ぬども四季亭の親方が受取た儘帳簿筒を乗捨て置ぬをチラリと見た故濟ない事とと
 思つたが脊よ腹は換られぬと透城鏡ひ懐中へ入れるや否や駈出したれば咄す間さへ
 もなかつぬと紙幣の包を懐中から出し掛る残れし禁炎山中と言ふ殊に真夜中何所

よど穿いぬ悪漢が聞て居まんに限らぬを夫は矢張を乃儘よと言ふを吉松聞わへすい
 エく私が持て居ては何だか氣味が悪いうら此儘お前懐中へと渡すを受取探り見
 て思ひの外亦是は大札先此嵩では五圓札でも屹度百圓くらゐらふと荒爾く物にて
 内懐中へ確と納めて空打詠め何たか今にも降るうな雲の模様もなつたれば足が痛み
 を爲やりけれと些ども疾く此山を越して寛りと休ばふと吉松を諫め勵まし静に手
 取降りながら尙一里程も辿るうち吉松の雨足と漸次に腫上りてとや一足を運べぬ上
 に持病の癩へ取詰てウンとむうりに反返る又駒吉と吃驚して種々介抱とする物の
 慌て宅を出ぬ故又薬の準備とてもなくコリヤ何様しぬら能うらふと鳥鷲付く傍に谷
 川の水音する羨幸ひと我か手拭の端を濡らして女の口へそへ入れ聲を限りよ名を
 呼べを其聲耳よ通してや姑くあつて吉松も正氣附しに安堵としたれと腫ぬる足と滋
 く痛みて踏出しがぬきに困り果ぬが降かど見たる雨雲の幸をよして晴渡り山の端
 昇る月影の路次を照すに便宜を得て是なら脊負て歩行やると駒吉は傍よ落散る竹

を杖^{つゑ}なし漸^{おそ}吉松^{きちまつ}を脊^{せなか}中に負^{おん}て草^{くさ}臥^ふ足を引^ひ摺^{ずり}ながら一^{ひと}町^{ちやう}行^いて立^た憩^{やす}ひ二^{ふた}町^{ちやう}行^いては肩^{かた}城^{しろ}休^{やす}めて辛^{から}く山路^{やまぢ}を越^こゆる程^{ほど}に夜^よもやのく^くと明^ある頃^{ころ}一^{ひと}ツの^つ小^こ村^{むら}へあどや着^つき蘇^そ生^{せい}た心^{こころ}持^もしぬれば爰^{こゝ}で寛^{ゆる}と体^{てい}足^{あし}爲^なるや宇^うと彼^あ方^{かた}此^{こゝ}方^{かた}と見^み廻^{まわ}せを今^{いま}戸^{こゝ}を明^あしと覺^{おぼ}しくて門^{かど}乃^{すなは}障^{しやう}子^ごに一^{ひと}せん飯^め酒^{さけ}肴^{あひな}と書^かぬと田^い舎^やの料^{れう}理^り屋^や体^{てい}なれを是^{こゝ}幸^{さい}ひと立^た寄^よて先^ま朝^{あさ}飯^{いひ}の注^{ちゆう}文^{もん}を做^おし奥^{おく}まりぬる小^こ室^{むろ}へ庭^{にわ}城^{しろ}傳^{つた}へて二^{ふた}名^なと這^は込^こみ勞^{らう}れ果^はして姑^{しやう}く^くと物^{もの}も言^い得^えず倒^{たふ}れて居^ゐるうち詠^{あつら}への朝^{あさ}飯^{いひ}城^{しろ}持^もて出^でぬるに起^お直^{ちやう}空^{そら}腹^{はら}あればさし闇^{やみ}す膳^{ぜん}を引^ひ寄^よせし兩人^{ふたりにん}が箸^{はし}取^とる手^ても遠^{いとほ}はしく食^く込^こたるに漸^{おそ}くと力^{ちから}付^つた氣^き駒^{こま}吉^{きち}が四^よ邊^{へん}見^み廻^{まわ}しコ^こレ吉^{きち}松^{まつ}先^ま刻^{とき}和^わ女^にが渡^{わた}した紙^{かみ}幣^{へい}を改^か免^{めん}やうも途^{ちやう}中^{ちゆう}も其^{その}儘^{まま}爰^{こゝ}まで持^もて來^きぬが一寸^{いちゆん}算^{さん}へて見^みやうか其^{その}所^{ところ}の襖^{あこ}を立^た切^きて人^{ひと}の來^きぬや宇^う氣^きを付^つけ小^こ聲^{こゑ}で吩^い附^つ懐^{くわい}中^{ちゆう}うら以^い前^{ぜん}の包^{つぱう}を取^と出し披^{ひら}いて見^みれと這^こと如何^{いかに}今^{いま}まで五^ご圓^{えん}か十^{じゆ}圓^{えん}の大^{おほ}札^{さつ}なアと思^{おも}ひの外^{ほか}郵^{ゆう}便^{べん}はが死^しを廿^{にじ}四^し五^ご枚^{まい}重^{おも}ね合^あせてあアぬるも二^{ふた}名^なも是^{こゝ}と吃^く驚^{きやう}仰^{おほ}天^{てん}呆^あれて辭^{ことば}もなうアしが興^{きやう}め顔^{かほ}あは駒^{こま}吉^{きち}と膝^{ひざ}立^た直^{ちやう}してヤイ吉^{きち}松^{まつ}手^て前^{まへ}と此^{こゝ}身^みを馬^ま鹿^かにして斯^かして此^{こゝ}所^{ところ}まで釣^つ出^だし

たうと腹^{はら}を立^たたれ吉^{きち}松^{まつ}は泣^な出しさうな顔^{かほ}をして何^{なん}でお前^{まへ}を欺^{たぶ}しはせり昨^あ夕^{ゆふ}横^{よこ}町^{ちやう}の吉^{きち}文字^{もんじ}屋^やうら慥^{たしか}に且^{かつ}那^な又^{また}渡^{わた}したは紙^{かみ}幣^{へい}又^{また}違^{ちが}ひはなうつたを帳^{ちやう}簿^ぼ筒^{とう}へ乗^のせるまでは次^{つぎ}の間^まで確^{たしか}と見^みたれと折^{をり}りら二^{ふた}階^{かい}の客^{きやく}に呼^よべ一日^{いつたんにち}揚^あつて又^{また}下^{くだ}りて見^みると札^{さつ}の包^{つぱう}み其^{その}儘^{まま}あつて且^{かつ}那^なと見^み世^よへ出^でてぬ故^{ゆゑ}フト出^で來^き心^{こころ}で持^もて逃^{にげ}たがさういふ事^{こと}も那^{あの}札^{さつ}が五^ご厘^{りん}はがさし換^かはぬやら夢^{ゆめ}のやうだ今^{いま}もふ体^{てい}がはんざら嘘^{うそ}と思^{おも}はれぬと道^{みち}も腹^{はら}も立^たれぬと一旦^{いつたんにち}逃^{にげ}ぬ長^{なが}崎^{さき}の再^{また}ひ歸^{かへ}ぬことにも行^い路^ぢを別^{べつ}れ二^{ふた}名^なの所^{ところ}持^も金^{かね}が幾^{いく}許^くあるくと出^だして見^みれを双^{さう}方^{ほう}合^あ合^あて三^{さん}圓^{えん}に少^{せう}し足^{たり}ない位^{くらひ}も是^{こゝ}では何^{なん}所^{ところ}も行^いれぬ額^{がく}を聚^あめて思^{おも}案^{あん}ぢうちよ考^{かんが}ひ出^だしぬ事^{こと}も吉^{きち}松^{まつ}はさし寄^よて兼^かへて豊^{とよ}前^{ぜん}の小^こ倉^{くら}うの商^あ業^{ぎやう}用^{よう}で長^{なが}崎^{さき}へ度^{たび}々^々來^きて私^{わたくし}を呼^よぶ上^う田^た藤^{とう}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}としぬ人^{ひと}を種^{しゆ}々^々に何^{なん}やあして金^{かね}で轉^{ころ}んだ事^{こと}も何^{なん}れぬが其^{その}藤^{とう}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}と餘^{あま}程^{ほど}の金^{かね}満^{まん}家^か是^{こゝ}り行^いて手^て管^{くだ}に乘^のりた旨^{ちよ}旨^{ちよ}に都^つ台^{たい}にならぬも知^しれぬ前^{まへ}の腹^{はら}はと問^と掛^かられ駒^{こま}吉^{きち}と打^う案^{あん}トて小^こ倉^{くら}と言^いつても爰^{こゝ}らとなく近^{ちか}い道^{みち}でと赤^{あか}茶^{ちや}とと他^{ほか}も工^く夫^{ふう}の付^つないからとまア然^さずすゑと極^{きよく}もしや宇^うが寐^ねずに歩^あ行^いて勞^{らう}

れをそれ心追人の掛るも氣遣ふ故姑く愛て氣を抜ふと腕を枕に兩人が眠るをなや
 放心く十二時過ぎまでまどろみしがモシお客さまく正午も餘程過ぎしぬれを
 目が覺たらし膳で進ませ給う身宿の主人に呼覺されて駒吉の目を指がら起直
 何で能から有合を飯を出して貰はふが序音がら聞たきは昨夜はツイ身道迷ひ知
 らぬ山路を當てて進んで愛までは歩行着たが當所と何とい處所で是から豊前の小倉
 へ行くには何れが便路と尋ねれば主人は徹とて逃亡者と目は着ぬれと然氣を此所
 と三宅といふ村にて小倉へ行くよは本道と抜道と二筋に別きて所が其抜道は
 少しく遠く八十餘里を有る替りにと人目も物も入らず路次乃都合と云くと其敷
 へ方は深切あるに駒吉と懇んを勞れ果して寢込居る吉松を揺起し俱に午飯を喰て
 後後等に長居は宜しからねむ是より又も夜道を掛て行方少しも急がんとて飯代
 ど乃拂むとして稍二時頃此家を立出教へられぬる道を辿りて豊前の方と行程に
 抜道なきは難所も多く殊に乏し路費也へ二三日よして遣ひ果給を吉松の櫛簪か

ら帯その外を追く賣て辛く
 小倉へ着ぬる頃は吉松は素小
 袖壹ツ駒吉と單衣を壹枚肌
 纏いしのみにてとや登錢の時
 へもあけきば並乃宿屋へ這入
 がたさに町外れある安泊宿
 頼んで泊込たるはまた正午前
 は六にして合宿人達が午
 飯残注文はるよは威前錢に代
 残渡していつきを頼む様子ゆ
 る貳名も腹は減く居れと泊
 早く錢がないとぞん不都



合も言にくさに近所を喰て来た顔成して嘶け序に上田藤石衛門乃宅の様子を尋れ心
 夫は同所彌左衛門町を一言言て二とと下らめ立派な呉服屋さん身は嘶しに貳名は飛
 立程に歡ひ直にも行たく思へども晝は問と此衣裝を尋ねて行れる譯でなければ日の
 暮るの残待やどに漸次に腹がへこくする程透て来て耐へられねを餘儀なく駒吉は
 裸に赤けて宿は蒲團を身に纏ひ壹枚物の單衣成賣て呉る身主人に頼免は折から古手
 屋が居合せて早速に咄しお整ひ壹圓八十錢と直が出来たれ自分も裸で居られねば
 五十錢にて古單衣を其うちから買受て是を漸く夕飯に有付やふよおつた頃は兎角
 し一日も昏たればサア是からが一混腫と吉松は宿屋に居る一個の爺を案内に頼み彼
 上田今いふ呉服屋の隣家の軒下に姑々イみ案内は爲頼んで來ぬ宿屋の爺に云く
 ど口上殘言含えて渠の今一名見世へ遣はし首尾好藤右衛門を呼出させおを一狂言
 待て居るうち彼爺は見世よ至り目那様にお目に懸つてや上たい事があれば御對面成
 身言入れる残店先に居る手代が見返りお前と何所から何の御用でお出なさつた今問

返さるこへ長崎とて言ぬ物の委しい譯と素よ知らず殊よ手代に口上振を言て能や
 ら悪いやら其所等の都合も解らねば何かグツグツ曖昧な返辭をすゑに手代と怪しむ
 夜中にみんな胡亂な爺は速々歸すが能うらふと思へば折角のね出だが主人と儀餘も
 い來客でお目に懸る事がならねを用がほるなら明朝とされと鼻乃先よて會釋とれ手
 持無沙汰に外へ出て吉松よ斯と告れを乍ら望みを失ふながら是非さく宿へ立歸つぬ
 が實と仕や陰が下手であつぬと其夜宿から視成借受け細ぐとした文を認め翌日の
 正午過に昨夜の爺と同道して上田は近所の小料理屋へ吉松は揚込み件は文を爺よ渡
 して是を上田の旦那へ進げとふぞ此所まで進出してと言含えられて爺と呑込み順て
 上田の店へ行て此お手紙を旦那さまへと指出すを見て手代共が昨夜の爺イが又來ぬ
 かと思ひながら手紙がほる故取次れぬとも言兼て奥へ持行主人に渡す幾何心ある
 上書を讀は上田御旦那さまへ吉松よと書ぬ手跡よ覺るもいさむハテナと首成捻つ
 ぬが何は兎もわれ遊妓うら使が來ぬと家内乃者に若惜られては面目なりと思へ心態

と然氣なく其使には用事もあれば是へ通せと呼入れあるを與ふる離れ座敷へ連行き
其所にて文を披き見れを始めはさまくなまめいた文句を並べた其末は據な記譯
あつて獨長崎の四季亭或斯出して參りましたは旦那さまよお目に掛り御相談が致し
ぬさは是非此人を御同道はて只今ね山下されぬと御目も下の其上にてと認めある
に合點行跡を論に様子を尋てを私之委しい譯は知り給と此先の料理屋迄旦那のお供
をして来いとツヒ頼れて来ましぬと返答されは仔細は知れぬと遙く尋て来た物を
打捨て置れぬと頼て返書とさらくとい認め此返事にも書て有が何分今は出にくけ
れば天神前の開進亭に晩方から来て待て居るや政傳へて呉ろと言ながら件乃返書に
取添て幾許り使の爺にも酒代を包んで取らせた故爺は歡び受戴彼料理屋まで立歸
り上田で言れぬ事柄城断し返書を渡し又吉松之又いけなんだと舌打鳴せと返書の上
にも開進亭にて今夜は必ず會ふとある故日の昏るまでの辛抱だと僅ながら其料理
屋の勘定をして立歸るを首領長を待て居た駒吉は是くどの咄と城開て力落し

然うオツくとして居て一枚着物を賣た錢も残りも漸と三四十錢是が命の綱かと思へば此身ア實に氣が引るといふを吉松うち消て斯ういふ返事が來たからは今夜の吃度間遠ひあく私が働わして見せるが因るのは私の身形料理茶屋故めつかまし
く是で出掛て行たけれと開進亭とる言宅の小倉切の料理屋と聞ハ衣物は是で我
慢をし櫛が賣とと帯と襦袢丈も愛の亭主を何とか頼んで振料でも借たいと言え無
理と思とれぬが上田の旦那會さむとせは金に取付目途もかれバと亭主を旨く説
付て漸と帯と襦袢の二品を借て衣裝を繕ひ例の爺を案内に頼み替て人顔も見判ぬ頃
は開進亭へ至とて見るに思ふに増たる立派な構へで豫て藤右衛門から云々と沙汰で
もあつた物と覺しく吉松が來ると見るよと乍ら仲居が兩三名見世先まで出迎へて上
田さまのお容ですがサア這方へと喋く言ふよ吉松の會を爲ながら供の爺と
見返りてお前の能から最うお歸りと言捨て揚が掛るを仲居供が誘ひて三階の廣座敷
に眞晝の如く燭臺を點せし上座へ渠を直らせ種々の酒肴を運び出して只今旦那が

出ですからアアお二語と叫喚にもてなす仲居の衣装より我が風俗の遙かに劣るに
 度胸と居ても其所は女氣肩身が狭きに吉松と只モツとして居る所へへ今晩は
 と五人の遊妓が進て来たけにいよく駭沈人の心も知らないで何故かアアんなと思
 ひながら實に困つた体で居ると土地の遊妓の心での豪家の旦那の情婦で殊に長崎
 の遊妓とあれは蔑視されぬやう飾つて出ると誰より立派にして来て見れば容貌の美
 げれと吉松の衣装乃悪さに興の現たが道は商業柄丈あつて品能之其座を扱ふ折から
 藤右衛門の夜食の酒で醺酔加減の口輕に是の何れを別品揃ひと音ながら座へ遣入る
 を遊妓共の口ぐはオ、旦那さま先刻から姉はんがお待かねサアア、疾くお側へ
 無理に手を取め吉松の隣へ居らせられぬので久々振だと言ながら聲く吉松を打な
 ぬめ表裏悪さに吃驚し暫時ものをも言はさりけり

明治十六年十一月九日御届
 十二月二日出版

編輯兼出版人 武田龜吉